

平成29年度施設運営の全体概要

1 施設運営の基本方針

「『安全と健康、そして復興！』～地域社会（学校・企業・民間団体等）との連携～」をスローガンにし、次の3点を施設運営の基本方針に定めて運営を進めてきました。

- ① 特色ある教育事業の実施を通じて、青少年教育のナショナルセンターとしての役割を果たしながら、教育事業の充実に努める。
- ② 研修支援事業の一層の改善・充実に努力するとともに、利用者の安定的な確保に努める。
- ③ 地域との連携を深め、地域の拠点として「体験の風をおこそう」運動、「早寝早起き朝ごはん」運動の推進を図る。

2 教育事業について

教育事業における成果の把握とその普及の観点では、いくつかの事業でI K R調査や児童用情動知能尺度（EQSC）等の手法を取り入れて分析しました。

今年度は、県立の教育施設や他機関、近隣の大学との連携協力を強化し、事業内容の充実に努めました。

教育事業の概要は、以下の通りです。

（1）看板事業

通学合宿 テンちゃん一家の一週間 （「早寝早起き朝ごはん」運動推進事業）
《平成29年度「体験の風をおこそう」運動協賛事業》

小学生を対象に当施設から学校に通いながら、規則正しい生活リズムの育成とよりよい仲間づくりを目的に、対象校を同じ中学校区の2校とし、通学合宿（6泊7日）を実施しました。昨年度と同様に、滝沢市立滝沢第二小学校と滝沢市立滝沢東小学校の5～6年生に募集を行い、両校合わせて児童33名が参加しました。異なる学校・学年同士での共同生活や学習活動を行い、コミュニケーション能力や基本的な生活習慣の育成の充実に努めました。生活の基盤となる「衣・食・住」を児童自らの力で取り組み、レクリエーションや体カテストを基にした「身体づくり」を行いました。今年度は、一方の学校が一週間の日程の中に学習発表会の代休があったため、本施設の職場体験としてシュラフの搬出作業や体育館、曲り家、研修室の清掃などに取り組み、働くことの一端を体験しました。また、「中一ギャップ」解消に向けた取り組みとして、中学校の教員から直接中学校の生活について話を聞くことができ、中学生までに身に付けたい力や自分自身に不足している面を改善できるように個々に目標を立て、自宅に戻っても実行できるようにしました。全体を通して、自分でやるべきことはしっかり行い、学生ボランティアと楽しい時間を共有しました。

（2）地域力向上事業

① **さんりく体験！発見隊** 《平成29年度「体験の風をおこそう」運動協賛事業》

東日本大震災から7年が経過しました。「震災を風化させない」「忘れない」ために、震災当時の様子を知ることに加え、三陸の海洋資源について学んだり、被災地で「民泊」をしたり、様々な活動を通して、被災地復興の現状を理解し、復興支援の一役を担う意識を高めることを目的とした事業です。

岩手県立陸中海岸青少年の家と連携して検討委員会を組織し、企画段階から検討を進めました。

1日目は、釜石市役所防災危機管理課や宝来館で津波についての様子や備えについて話を伺い、自分の命は自分で守る意識をもつことの大切さを学びました。初日の宿泊施設である岩手県立陸中海岸青少年の家では、海釣り体験を行いました。2日目は、東京大学大気海洋研究所の公開イベントに参加し、震災後の海中の変化を学んだり、海の生物を直接触ったりと普段はできない体験ができました。大槌の住民による祭りも行われており、海とともに生活をする地域の人々ともふれあうことができました。この日は、田野畑村において民泊体験を行い、9つの受入家庭に分かれ、漁業体験や食事作りなどを通して、沿岸に住む家族と交流を図ることができました。最終日は、サッパ船の乗船体験と机浜番屋群の見学を行いました。参加者からは、震災に関する学びを積極的に取り組みたいという気持ちが伺えました。

② **タートルズ キャンプ** 《平成29年度「体験の風をおこそう」運動協賛事業》

児童養護施設との密接な連携により、課題を抱える子供たちの自立支援を目的とした事業「タートルズ キャンプ」において、「アドベンチャー」をテーマに実施しました。今年度も、3つの児童養護施設と1つの情緒障害短期治療施設の参加で、事業開始から8年目を迎えました。本事業名の由来となる「自分の殻から顔を出し、まわりを見る勇気を出してほしい。様子を見て、少しずつ手足を出し、ゆっくり一歩ずつ自分のペースで歩み出すことができるように・・・」のとおり、子供たちが成長を実感する様子を見ることができました。イワナつかみ体験、秘密基地づくり、流水プールにおける水泳やウォータースライダー体験、缶バッジ作りなどのチャレンジを通して自己肯定感を高める活動と、野外炊事やソフトボールなどの交流を通して社会性を養う活動を取り入れてプログラムを構成し、施設の枠を越えた参加者同士の交流も見られました。

(3) 貧困対策事業

親子めんこいキャンプ（子供の貧困対策事業「生活・自立支援キャンプ」）

《平成29年度「体験の風をおこそう」運動協賛事業》

盛岡市にある母子生活支援施設に入所している親子を対象に、自然体験活動や集団宿泊体験等を通して基本的な生活習慣の確立をめざすとともにコミュニケーション能力の向上を図り、それぞれの目標に向けてやり通し、自分に自信をつけることをねらいとして実施しました。このキャンプに参加する世帯のほとんどが、冬休みに家族で出かけたり、遊んだり自然体験をする機会が少ない親子であることから、県立の施設と連携し、夏は海辺、冬はウインタースポーツと、季節感のある体験活動を行いました。

参加者は、初めての体験にも積極的に取り組んでいました。初めて体験したことがうまくできたことやコミュニケーションがとれるようになってきたことで、自信につながり、さらに新しいことへの意欲につながっていったと思われ、子供たちだけでなく、母親にとっても思い出に残るキャンプになりました。

(4) 国際交流事業

日独学生青年リーダー交流事業（文部科学省委託事業）

ドイツ団の16名は、ドイツ国内でボランティア活動を行う等、様々な社会貢献をしている大学生を中心とした高校生から社会人の方々でした。

岩手山プログラムでは、法人ボランティアと一緒に、意見交換や野外炊事の活動を行いました。夜には、法人ボランティアとスポーツ交流会をとおして交流を深めました。また、3つのグループに分かれて滝沢市立柳沢小学校に訪問し、子供たちと交流する内容を企画して授業を行いました。ボランティア同士や子供たちとの交流をとおして、「子供の体験活動の機会を提供するための支援」について理解を深めました。小学校訪問やホームステイ等の体験をとおして、日本の文化についても理解を深めることができました。

(5) 指導者養成事業

① How To ボランティア，体験活動支援セミナー 秋・冬

《平成29年度「体験の風をおこそう」運動協賛事業》

青少年教育施設でのボランティア活動の基本を学ぶ「How To ボランティア」と、実際に「テンパークちゃれんじくらぶ」に参加した子供たちのグループリーダーとしてボランティア活動の実践を学ぶ「体験活動支援セミナー」を開催し、それぞれ多くの大学生・高校生が参加しました。

② NEAL 自然体験活動指導者（リーダー）養成研修

「How To ボランティア」においてガイダンスを行い、「ボランティア・ブラッシュアップ・プロジェクト③」と兼ねて講義・演習を実施しました。自然体験活動の特質、技術や安全管理等について研修を行いました。

③ 教員免許状更新講習

岩手大学と連携し、「安全面に配慮した自然体験活動の実際」と「体験活動プログラムによる人間関係づくり」の2講習（各6時間）を行いました。講義と演習を行うことで、理論と実践を結びつけて講習を行うことができました。

④ ボランティア・ブラッシュアップ・プロジェクト（8回）

岩手山ボランティア育成ビジョンに基づいた3年目の事業です。今まで学んだボランティアとしての知識や技術のスキルアップの機会として、ボランティア自身の企画運営で「アイスブレイカーズ」（大学生対象のアイスブレイク体験）の企画運営を自主的に行いました。また、「テンパークちゃれんじくらぶ 秋・冬」に向けた企画会議や実地踏査を行い、教育事業に積極的に関わりながら、法人ボランティアのスキルも大きくステップアップしました。

(6) 普及啓発事業

① テンパークまつり2017 《平成29年度「体験の風をおこそう」運動協賛事業》

当施設が提供する活動プログラムを体験し、施設自体を広く地域の方々に知っていただくことを目的として「テンパークまつり2017」を開催しました。今年度も1泊2日（土・日）の親子宿泊体験と日曜日のみのテンパークまつりの2部構成で実施しました。今年度は「イーハトーヴ」による一輪車の華麗な演技の発表後、来場していた子供たちを対象に一輪車教室を開催し、大盛況でした。また、つどいの広場において「遊びリンピック」を行い、様々な体験活動を提供しました。延べ2千人を超える家族連れが来場し、ステージ発表、スタンプラリー、創作活動など室内外のプログラムを楽しみました。

② テンパークちゃれんじくらぶ 秋・冬

毎回楽しい内容で、リピーターが多い事業です。小学校3年生から6年生を対象に、法人ボランティアが「ボランティア・ブラッシュアップ・プロジェクト」で企画した活動を体験しました。体験活動支援セミナーに参加している学生が子供たちのグループリーダーとして活動しますので、学生との触れ合いも子供たちの楽しみの一つになっています。

(7) その他の事業

○ 連携協力事業

Kids Together えいご de キャンプ in テンパーク

被災地域の子どもたちを対象に「Kids Together えいご de キャンプ in テンパーク」をHSBCグループとNPO 法人日本国際ワークキャンプセンター（NICE）との連携事業として実施しました。この事業は、平成20年度に始まった事業で、HSBCグループが資金とボランティアを提供し、NICEがキャンプの企画・運営を担当し、当施設が活動場所と指導者を提供するという三者による連携協力事業です。今年度は、「ハロウィーン」と「クリスマス」をテーマとして10月と12月に、岩手山青少年交流の家を会場に行われました。日・英2言語を活用し、参加した子供たちはHSBCグループとNICEの外国人スタッフ・外国人ボランティアと交流することで英語や外国文化にふれあう有意義な時間を過ごしました。

3 研修支援について

研修支援については、利用者の立場に立った業務運営に努め、利用者の研修をサポートするという意識を持って、親切、丁寧、迅速、笑顔での利用者対応を心掛けてきました。

また、利用者数の年間目標を定めるとともに、日常的に施設内の活動場所の安全点検を行い、安心・安全で清潔な活動環境を確保することに努めました。

(1) 研修指導・支援

利用団体の研修目的の実現のために、職員によるきめこまやかな事前相談を行うとと

もに、事前相談に来られない団体にも、電話連絡を密にし、利用前の不安をなくせるように努めました。ホームページの情報量を増やし、写真や地図などの資料を追加しました。

また、野外炊事・アドベンチャープログラム・七宝焼などの研修において直接指導を実施しました。研修の質を高めるため職員研修を行い、より多くの職員が対応できるようにしました。

(2) 施設の利用状況及び利用者の評価

平成 29 年度の年間目標として、総利用者数 112,100 人以上、宿泊室稼働率 53.0%以上を目標としていましたが、総利用者数 112,841 人、宿泊室稼働率 51.2%となり、利用者数は目標を達成しましたが、宿泊利用者の減少により宿泊稼働率は目標に届きませんでした。今後とも広報活動や成果普及活動を行い利用者の確保に努めたいと考えています。

利用団体からのアンケート「当施設を利用しての総合的な満足度」をみると、「満足している」が 91.5%、「やや満足している」が 8.3%、両者を合わせると 99.8%が「満足」と回答し、高い評価を得ることができました。利用団体からの意見・要望等については、事務連絡協議会でその内容を確認し、対応できるものはすぐに改善するように心がけています。

(3) 利用者の安全で快適な生活環境の確保、危機管理

利用者が安全・安心で清潔な生活環境のもとで、快適な研修活動が実施できるように、施設設備の整備・点検を定期的に行うとともに、想定される様々な災害・事故等が発生した場合の具体的な危機管理マニュアルを策定しています。

近年クマの目撃が増えており、安全対策として、クマを目撃した場合についての資料を作成し、団体に配布するとともに、利用者が野外活動を行う前にコースを職員が爆竹を鳴らし、発煙灯を焚いてから活動に入ってくださいなどしておりましたが、平成 29 年度も 2 頭の目撃があり、オリエンテーリングコースを一部使用禁止にする対策を取りました。スズメバチ対策については、トラップを自作し敷地内各所に設置するとともに、巣を発見し次第駆除しています。

4 地域との連携、社会貢献について

施設の運営に当たっては、様々な団体・個人と連携し、協力をいただいています。また、社会教育実習生やインターンシップの受け入れも随時行いました。

(1) 教育事業における連携・協力

教育事業は、その目的・内容によって地域の団体との連携が不可欠です。教育事業における主な連携先は以下の通りです。

- タートルズキャンプ・・児童養護施設：みちのくみどり学園，青雲荘，和光学園
- ・情緒障害児短期治療施設：ことりさわ学園
- 教員免許状更新講習・・岩手大学，教員免許状更新講習連絡協議会
- テニパークまつり・・児童養護施設，地元団体，企業 等

- 通学合宿・・・滝沢市立滝沢第二小学校，滝沢市立滝沢東小学校
滝沢市教育委員会，岩手日報社，盛岡大学
- Kids Together えいご de キャンプ・NICE，NSBC，陸前高田市教育委員会等
- さんりく体験！発見隊・岩手県立県南青少年の家，岩手県立陸中青少年の家，
NPO 法人 体験村・たのはたネットワーク

(2) 盛岡大学との連携・協力

平成29年2月9日に，盛岡大学・盛岡大学短期大学部と国立岩手山青少年交流の家は，これまで培ってきた信頼関係と連携・協力の実績を基盤とし，より一層，緊密かつ組織的な連携・協力体制の充実を図り，自然の中での活動を通じた社会貢献及び教育・研究の発展に寄与することを目的として包括協定を締結しました。

平成29年年度も，社会教育活動実習において，「How To ボランティア」「体験活動支援セミナー 秋・冬」「テンパークまつり」の事業に盛岡大学の学生が参加することで，学生は単位を取得することができ，法人ボランティアとしての活動の幅を広げることができました。

「親子で遊ぼう！～ダンボールと雪遊び～」においては，幼児教育系の教員に呼びかけていただき2名の学生が事業に参加するなど，盛岡大学と連携・協力の体制が広がりを見せています。

(3) 岩手県内の青少年教育施設との連携・協力

11月8日～9日に，岩手県内の青少年教育施設（県立県北・県南・陸中海岸青少年の家，盛岡市立区界高原少年自然の家）と合同で集団宿泊教育施設連絡協議会（宿泊連）を開催し，研究協議や情報交換を行いました。

今年度は，岩手県立県北青少年の家で開催され，折館 一男氏を講師に招き，「美しい日本語を伝えたい～岩手の昔話から～」の講演がありました。2日目は県北青少年の家においてカーリング体験を行いました。

(4) 岩手県国際リニアコライダー推進協議会との連携

国際リニアコライダー（ILC）の日本・東北誘致実現に向け，産学官民の協力体制を築き，岩手の産学官民連携し設立された「岩手県国際リニアコライダー（ILC）推進協議会」に当交流の家も加入し，地域と共に誘致に向けた取り組みを行いました。

同協議会が次世代の科学技術人材の育成を推進するため，将来を担う子ども達に先端科学に触れる機会を提供することを目的として，7月17日（海の日）にいわて県民情報交流センター アイーナで開催された「岩手サイエンスシンポジウム（いわてまるごと科学館）」に参加し，岩手大学をはじめとする県内の高等教育機関や県内の公設試験研究機関等と共に科学体験を提供し，ブースは多くの家族連れで賑わいました。

(5) ボランティアとの連携・協力等

子供を対象とした教育事業の際に大学生や高校生などにグループリーダーとして運営

の補助をしてもらいました。また、広大な施設の環境整備は職員だけでは限界があるため、地域住民からなるボランティアの協力により、草刈り・花壇整備などの環境整備を行いました。

① 施設ボランティア（法人ボランティア）

大学生や高校生などによるボランティアを育成し、希望者には法人ボランティアとして登録してもらい、様々な教育事業に協力をいただいています。今年は、99名のボランティア（新規38名、継続61名）が登録しました。平成29年度に法人ボランティアが活動した延べ人数は、484名でした。

② 環境ボランティアによる環境整備

平成29年度も地域住民を主体とする環境ボランティアによる環境整備活動を実施しました。4月から9月までの期間、施設内外の草刈りやキャンプ場などの整備を職員と共に行いました。ボランティアの皆さんの献身的な働きにより、当施設の環境が保たれています。（登録者19名、年間5日、参加者延べ77名）

③ 盛岡峰南高等支援学校生徒による花壇整備

岩手県立盛岡峰南高等支援学校高等部生徒の皆さんによ、毎年花壇を整備していただいています。

生徒と教職員の方々は、5月から10月までの間、月に1回程度来所し、施設内にある花壇2か所（利用玄関前、第2駐車場前）に、春にはメランポジウム・サルビア、秋にはパンジーを植栽し、除草、追肥等の作業を行っていただきました。（年間7回、参加者延べ88人）手入れの行き届いた、沢山のきれいな花々に迎えられて、多くの利用者から大変喜ばれています。

また、5月7日には、生徒の皆さんにご協力を頂き、交流の家北側の県道沿いにベニヤマザクラの木約150本を植樹し、青空の下で記念植樹式を催しました。将来、約500メートルに亘り桜の花が咲き並ぶことでしょう。満開の桜を咲かせる日がとても楽しみです。



生徒の皆さんと植樹の記念写真

(6) 社会教育実習生・インターンシップの受け入れ

平成29年度も29名（盛岡大学）の社会教育実習生の受け入れを行いました。

また、インターンシップ3名（岩手県立大学2名、盛岡大学1名）の受け入れを行いました。

(7) 食堂での地産・地消の取組み

平成29年度から、岩手県立盛岡農業高等学校と岩手大学農学部附属農場の協力により、同校で収穫されたリンゴを食堂で提供し、利用者から新鮮でとてもおいしいと好評でした。

5 職員の資質向上について

平成29年度においても、事業における企画力・指導力・安全指導、利用者との接遇サービス・コミュニケーション能力、職務遂行上の専門能力、危機管理、子どもゆめ基金、「体験の風をおこそう」運動、服務規律等の職員の資質向上を目指し、職員研修を行いました。

施設内研修として25件（参加者延べ342名）の研修を実施しました。外部の研修には14件（参加者延べ49名）の研修を受講しました。今後も積極的に実施・受講し、職員の資質向上を図り、全職員が利用者に対し、安心・安全、親切・丁寧で迅速な対応を心がけていきます。

また、近年全国各地で熊の出没が増加し、当交流の家周辺においても目撃情報が相次いでいることから、日本の熊研究の第一人者である岩手大学名誉教授 青井俊樹氏を講師に招き、ツキノワグマの生態や、熊の被害・事故防止、人間とクマとの共生の道などを学ぶ、『国立岩手山青少年交流の家公開学習会「ツキノワグマの生態と被害防止」～ツキノワグマの被害にあわないために そして自然との共生を考える～』を開催しました。学習会には、教育・自治体・研究機関・マスコミ関係者等が参加し、活発な意見が交わされ、新聞でも大きく取りあげられました。

6 「新しい公共」（効果的・効率的な組織の運営）への取組について

当交流の家では、施設業務運営委員会が、施設の運営における取組指針や事業運営計画策定、事業の点検及び評価など、管理・運営の役割を担っています。

平成28年に策定された国立青少年教育振興機構の第3期中期目標・中期計画（平成28～32年度）において、より地域と一体となった効率的・効果的な管理運営を目指すため、地域の多様な主体が実際に施設の管理運営や事業の企画・実施に参画する「運営協議会」方式を導入することが、各施設に求められました。

このため、当交流の家では、平成29年度第2回施設業務運営委員会に於いて、同委員会の下に「部会」を設置し、部会において地域の人材を発掘・登用し、事業の企画・実施などに参画して頂くことにより、地域と一体となった施設の管理運営の体制を強化し、整備していくことを提案し、了承されました。

平成30年度からは、施設業務運営委員会の下に、①事業部会（教育事業の企画運営、外部団体との連携など）、②利用促進部会（利用促進、広報など）、③管理運営部会（人材育成、寄付金の獲得等）の3部会を設け、地域の意見等を施設の運営により取り入れた、効果的・効率的な組織の運営を進めていきます。